

ついに自民党の軍門に下った 松崎 労働部 部長 松崎 勤



日刊 動労千葉

86. 4. 26
No. 2226

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八 (動力車会館)
(鉄電)二九三五(六) (公衆)〇四七二(22)七二〇七

組合綱領すら破棄し、当局と鉄労との合体を宣言

動労革マル・松崎は、なんと中曽根・自民党の機関紙上で「転向声明」を明らかにした。「次期大会で綱領を変える」「鉄労がイニシアチブ(主導権)をとって国鉄の労組を統一すべき」「民営的手法を發揮できるのは分割しかない」これが松崎の本音だ。左翼的ポーズの最後のイチジクの葉としての総評・社会党方針すら放棄、「分割・民営化」賛成を公言し、政府・資本家に忠誠を誓い、国労解体＝国鉄労働運動解体＝産業報国会の尖兵となることを宣言した。この反労働者分子、動労革マルを必ず追放・一掃しよう。

産業報国会へまっしぐら

自民党機関紙・自由新報のインタビューに答えて明らかにしたその内容は、商業新聞にすら「松崎委員長事実上の転向」「動労、社会主義と決別へ」と書かれるほどすさまじいものである。

松崎は、綱領について「共同宣言(スト放棄・首切り合理化協力)を踏まえないと国鉄の明日はない。現在の綱領は、その精神からすると率直に言っつてふさわしくない。社会主義政権を目指す」と語っている。・・・これを変える方向にふみきつた」と語っている。

動労の綱領は、

綱領

- 一、われらは、労働条件の改善と生活向上のために闘う。
- 一、われらは、労働基本権の奪還、基本的人権の確立のために闘う。
- 一、われらは、戦争とその政策に反対し、世界平和の実現のために闘う。
- 一、われらは、国内外の労働者の階級的連帯を強化し、その解放のために闘う。
- 一、われらは、反動政治とその権力を否定的にとらえ、社会主義社会樹立のために闘う。

これを変えるとは、何を意味するのか。戦前の全日本労働総同盟がストライキ放棄から階級的労働運動の放棄、そして産業報国会へ戦争へと突き進んで行った道そのものではないか。

鉄労中心に国鉄労働運動統一を叫ぶ

国鉄労働運動について「国鉄内労組は将来統一すべきで、その場合、やはり鉄労がイニシアチブをとるべきだ。国労については未来がないし、そんなものに未来があるとすれば日本の未来がなくなる」と公言している。これは一体なんだ。国労は、かりにも総評労働運動の中心をなしている組合である。それに未来はなく、あったとしたら日本が減ぶとは、現在の総評労働運動の全否定「戦後労働運動の総決算」を叫びたてていることではないか。まさに、中曽根のイヌ以外言えないこと

だ。戦争賛美の天皇六〇年式典に参加し、メーデーに赤旗ではなく日の丸をかかげる同盟系の鉄労を中心に、国鉄労働運動を染めあげるなど、どうして許せるか。

動労「本部」革マルは、四月十九日「労使共同宣言実行三組合連絡会議」を結成し、今後、真国労も加え、四組合にして合同執行委員会を行うと、労使一体路線のもと国労解体＝右翼労組による国鉄労働運動の統一の動きを開始している。

資本・当局の手先 動労革マルを追放せよ

松崎は、ついに分割反対を下ろし、「分割・民営化」賛成をも打ち出した。

もはや動労革マルは、総評・社会党ブロックとすら決別することを宣言したのである。政府・当局のカサにかかった攻撃に大喜びし、労働者はもう反撃できないだろうと思えば、もう何を言っても、やつても大丈夫とばかり、本性をあらわにした動労革マル・松崎に、労働者は、それほど弱くはないし、国鉄分割・民営化の闘いもこれからは勝負だと言うことを、思い知らせてやらねばならない。

全労働者の怒りを結集し、動労革マル追放・一掃、分割・民営化阻止へ第三波・第四波の闘いを実現しよう。

サークル協からのお知らせ

- * 第七回ソフトボール大会
 - ・日時 一九八六年五月三〇日
 - ・場所 天台スポーツセンター
 - * 第七回軟式野球大会
 - ・日時 一九八六年六月五、六日(一・二回戦)
 - ・場所 千葉公園野球場
- なお、これに伴う主将会議(ソフト・野球)を次のとおり開催します。
- ・日時 一九八六年五月十二日(月) 十四時
 - ・場所 動力車会館

動労「階級闘争」から転向

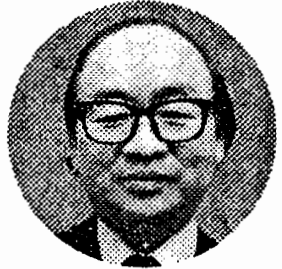
社会主義政権めざす

今の綱領なじまぬ

松崎委員長 鉄労路線で統一へ

国鉄の有力組合である動労（三万一千人）が、社会主義政権を目指す現在の綱領を破棄するとともに、将来、鉄労がインシヤチンを通じて国鉄労組を統一すべきとの方向に踏み切ったことが二十二日、明らかになった。松崎明委員長が自民党機関紙「自由新報」（四月二十九日付）のインタビューに答えたもので、「現在の綱領は、いまの時期にはなじまない。次期大会ではっきりしたい」と明言している。また、松崎委員長は国鉄改革について、「これまで反対していた「分割」にも、歩み寄りを示している。五十年のスト権ストで主役を果たした動労は、二数年、柔軟路線に転じていたが、今回の松崎発言は階級的組合からの、転向声明」ともいえる。国会で論議されている国鉄改革だけではなく、政界や労働運動に及ぼす影響はきわめて大きいとみられる。

「分割」でも歩み寄り



松崎 明委員長

「労働者の階級的連帯を強化し、その解放のために闘う」「反動政治とすべての権力を否認し、社会主義政権樹立のために闘う」といって、きわめて階級的色彩が濃い内容になっていた。

動労の次期大会は今年七月上旬に開催が予定されているが、松崎委員長は強い指導力からみると、綱領破棄が大会で決定される可能性が強く、二十一年間及ぶ動労の運動は、大きく転換することになる。

また、松崎委員長は国鉄内の組合のあり方について、「新しく出来た真国労には鉄労、動労、全鉄労の三組合とのきずなを強めよう、共闘機関をつくりたい」と語った。

四組合は、国労が（労使共同宣言の）ハードルを越えない限り、手を握るわけにはいかない。

国鉄（内）の労組は将来、統一すべきで、その場合、やはり鉄労がインシヤチンをとるべきだ。国労については未来がないし、そんなものに未来があるとすれば日本の未来がなくなる」と語っている。

この発言で注目されるのは、労使共同宣言以前は、大猿の仲といわれた同盟下の鉄労を高く評価し、逆に同じ陣営に加入して、国労を厳しく批判していることだ。鉄労を前面に押し立て、数多くある国鉄内の組合を統一し、全民労協に加入しようとしているのではないかとみられる。国労内では、

の共産系グループは、この動きを警戒しており、松崎発言の表面化で、激しい批判に出る可能性が強い。

このほか、松崎委員長は分割・民営による国鉄改革について「民営的手法を発揮できるのは分割しかない」という感じだとして、これまでの「分割反対」にこだわらない発言をしている。また、これまでウツサされてきた松崎委員長自身も、過激派、革マル派の關係については「かつては革マルに属していたことを否定するつもりはない。しかし、いまはいいはない」といって、はっきりと態度をおきたい」と語った。

松崎委員長の動労綱領の破棄発言は、動労が鉄労、全鉄労とともにスト権を否定する内容といわれる労使共同宣言を今年一月、国鉄当局と締結したことから、「労働基本権（スト権）奪還のために闘う」となどをうたった現在の綱領の見直し問題についての質問に答えたもの。

松崎委員長は「共同宣言を踏まえたいと国鉄の明日はない。現在の綱領はその精神からすると、率直にいってふさわしくない。社会主義政権を目指す、となっていてある時期には、まづかっているとは思わないが、いまの時期にはなじまない。綱領をつくったものの責任として、これを養える方向に踏み切った。次期大会ではっきりしたい」と語った。

動労綱領は五項目からなり、「労働基本権の奪還」のほかに、

「労働者の階級的連帯を掲げた組合は誤り」
 「労働者の階級的連帯を掲げた組合統一こそが」
 「スト絶滅の『労使共同宣言』と鉄労が」
 「スト絶滅をこりこりひらく」
 「インシヤチンをこりこりひらく」
 「国鉄の未来をこりこりひらく」
 「国鉄の未来をこりこりひらく」

労働運動の風上にもおけぬ裏切者=革マル松崎を粉碎・追放せよ!

自民機関紙
 会見で明言

サンデー
 4/23 昭和61年 (1986) (水曜日) 1594号
 PUSANBEI COMMUNICATIONS GROUP
 自民党の前にもびびるまじき、もみ手をこすりつけて、転向＝協力を申し出る動労本部「松崎委員長」